

KITOGO-HAN 木と合板

木とひと、暮らしを結ぶ誌上博物館

SUMMER 2015

30 夏号

◎シリーズ特別企画 第3回

「森林飽和—国土の変貌を考える—」(NHK books)著者 太田猛彦教授に聞く

—森と木と人間の関係史についての一考—

人間と森林の関係史に、今こそ新たなパラダイムの転換を

第3回 「護る森」と「使う森」—林業再生と木材利用はいかにあるべきか

新しいパラダイムへの転換が求められている

◎夏の特集—竹中大工道具館で学ぶ

たいせつなことは、大工と道具が教えてくれる

道具の王者、大工道具が魅せる万華鏡の世界

—ものづくりの技、匠、心を、未来に伝える博物館

●聴講体験レポート竹中大工道具館「大人のための木工教室」

さりげなくも奥深い 道具を手にして学ぶ、ものづくり体験

◎体験してみました！ ウッドターニング

いま、西日本で唯一の専門教室 ナカジマウッドターニングスタジオ

体験してみました！ ウッドターニング

いま、西日本で唯一の専門教室 ナカジマウッドターニングスタジオ

ウッドターニングという言葉をご存知でしょうか。
もしかすると普段あまり耳慣れない単語かも知れませんが、
既にご存知の方もいらっしゃるかも知れません。
"wood=木" "turning=旋回" 木工旋盤という機械を使って
木材を回転させ様々な形を削り出すことなんです。
お皿やお椀などの食器はもちろん、椅子の脚やペンの軸、
丸い物なら大概作れてしまいます。
(ナカジマウッドターニングスタジオHPより)

ナカジマウッドターニングスタジオは、いま、西日本で唯一の本格的なウッドターニング専門の教室です。そこにおじゃましてウッドターニングを体験してみました。欧米で便利な道具や技術が開発され、おかげで日本でも手軽な趣味としてウッドターニングを楽しむ人が増え始めています。

旋盤に木材を装着して回転させ、ターニングツールと呼ぶ切削刃を使って形を削り出す、といえば簡単そうですが、刃物を扱う作業なので危険も伴います。初歩的な予備知識や基本的な作業心得は、どうしても専門のプロの先生に教わる必要があります。この日は1日だけの体験コースに挑みました。回転する木に切削刃をあてるとシュルシュルと削り屑が出てくるのは快感！ どうかにか形が見え始めてきました。講師の中島信太郎先生は「初めてにしては、上出来ですよ」と言って下さいましたが、私たち二人の初めての作品（写真）、どうでしょうか。

各地のイベントでも紹介ブースを見かけるようになってきたウッドターニング。専門の教室はまだまだ少ないのですが、あなたもチャレンジしてみたいかたがたでしょう。木材・合板博物館にも、いつか教室を開設したいと思っています。
(博物館スタッフ長谷川麻紀、新谷百々香)



店内ギャラリーには中島先生の作品、樹種によって出来るものも違ってきます。中島さんは、材料はあくまで、廃棄された木材や端材を使い、どんなものも無駄にせず長く使えるものを、というこだわりで創っています。



左上／中島信太郎先生(左)とアシスタントの石井さん
左下／これってサラダボール？ 単なる小皿？ これが私たちの初めての作品。
右上下／初めての作業、緊張します



問い合わせは、ホームページで!!

URL:<http://www.nakajimawoodturningstudio.com/>



表紙：竹中大工道具館に展示されている唐招提寺金堂組物の実物大模型。(参照：本誌「夏の特集 竹中大工道具館で学ぶ」)

木材・合板博物館のご案内

アクセス 東京メトロ有楽町線
JR京葉線
東京りんかい高速鉄道
東京メトロ東西線
新木場駅 → より徒歩7分
東陽町駅 → よりバス
②のりば/木11甲・木11折返
新木場一丁目バス停 より徒歩1分

開館時間 10:00~17:00 (最終入館時間16:30)

入館料 無料

休館日 月曜日、火曜日、祝日 年末年始

*都合により開館日・時間を変更することがあります
*幼児および小学生の入館には、保護者のつきそいが必要です。
*団体での見学は事前にお申し込みください。

木と合板 第30号 2015年9月15日発行 定価:540円(消費税込)

発行：特定非営利活動法人 木材・合板博物館

〒136-8405 東京都江東区新木場一丁目7番22号(新木場タワー)

TEL.03-3521-6600 FAX.03-3521-6602 Eメール:info@woodmuseum.jp

編集：「木と合板」編集委員会

制作：株式会社デジタルアート



特定非営利活動法人 木材・合板博物館

<http://www.woodmuseum.jp>

木材合板 で 検索 クリック!!

[注記]

※1 低水工事(ていすいこうじ):河川改修方式の一つ。舟運のための航路維持などの利水を主眼とするもの。日本では明治中期に高水工事に転換するまで、河川改修の中心。(広辞苑第6版)

※2 高水工事(こうすいこうじ):河川改修方式の一つ。洪水防御を主眼とするもの。築堤、流水断面積の増大、障害物の除去などの工事。(広辞苑第5版)

都市の発達は地方都市も含めて、平野における工場、家屋などのインフラの集積を意味します。輸送システムは舟運から鉄道に替わっていきます。殖産興業を支え国税の大半を担う地方地主層、産業資本家は原材料調達や製品販売のために、またその流通に関わる都市の資産家たちは平野に集積した彼らの諸財産を守るために、治水事業として舟運確保を目的とする低水工事(※1)よりも洪水氾濫の防止を目的とする高水工事(※2)を強く望むようになります。

明治政府は一八九六(明治二十九)年の大水害を契機に、同年に「**河川法**」を成立させました。この立法は、それまで事実上戦国時代から続いていた低水工事主体の治水政策を大転換し、連続堤の建設を中心とする高水工事を実施するための法整備でした。また激化する土砂災害に対応して、治水上砂防を旨とする「**砂防法**」(一八九七年)も成立しました。

同時に国土保全を重視する気運も高まり、防災機能をもつ森林その他の保護を確実にする「保安林制度」と過伐・乱伐の禁止を強制する「営林監督制度」を二本柱とする「**森林法**」も成立(一八九七年)します。これら三つの法律はまとめて「治水三法」と呼ばれ、以降今に至るわが国の国土保全政策の根幹をなす法律となりました。

治水三法の成立は、わが国の山地保全事業を本格的に緒に付ける契機となりました。山地保全事業は、砂防事業と治山事業の二つからなり、砂防事業は事業地の下流の生命・財産を保全対象とし、治山事業は健全な森林・山地を維持・回復させることで森林の機能を効果的に発揮させようとするものです。二つはあいまって、土砂災害防止とともに十七世紀以降急速に進んだ山地荒廃を復旧させ、衰えた森林を回復基調に向かわせることにな

治水三法(河川法、砂防法、森林法)の成立

つていきます。

しかしその一方で、近代化による国土開発や長い戦時体制下での木材需要増大もあり、森林行政の全体は次第に木材生産を重視する方向に進みました。昭和時代には森林鉄道が普及し、山奥深くまで及びます。また、人口急増によって里山も酷使され、戦時色が強まるなかで国土保全事業は縮小し、軍事費の圧迫を受けた国の財政は木材収入への依存を深めたので、この木材需要の高まりが再び過伐・乱伐を重ねる結果となりました。

第二次世界大戦直後、国土の荒廃は明治初期にも劣らぬものでした。しかも戦後の復興に使える自前の資源は、減少したとはいえ木材資源より他にはありませんでした。当時のマスコミはこぞつて「なぜ豊富な木材資源を戦後復興に使わないのか」と伐採を促すキャンペーンを行い、国有林では戦地引揚者をひろく受け入れ伐採を促進しました。

木材生産への期待はさらに高まり続けます。住宅や都市の復興に続いて、今度は開発・高度経済成長の時代となり、木材需要は伸び続ける一方でした。伐つて売ればいくらでも儲かる時代でした。これを受け国は「**拡大造林**」の政策を進めます。軌道・林道を敷設し奥地林を大規模に伐採(大面積皆伐)して高い木材生産量を確保する一方、跡地にはスギ、ヒノキ、カラマツなどの苗木を植えて「一斉林」を出現させる。この施策は、残すべき天然林を「老齢過熟林分」(用材としてすでに充分成熟し、むしろ老化している森林)とみなして伐採し、その跡地に植えた人工林を合理的に経営すれば水源涵養機能も含めた森林の公益的機能も高まるとする予定調和論に基いていましたが、実際には木材生産の増大だけを目指すものでし

復興需要から高度経済成長へ、拡大造林の時代

た。この政策が頂点に達したのは林業基本法が成立した(一九六四年)ごろです。

また、同じ頃河川法が改正され、河川整備の目的に水資源利用が加えられ、巨大ダムが次々着工されました。この時代は、河川事業も高度経済成長を支える役割を担いました。インフラ投資の伸びが、高成長を支え、それは国家予算の伸びにそのまま反映される時代でした。国土の回復と保全事業を、国は制度面で支えるとともに潤沢な資金も投じたのです。こうして山地保全事業は制度面、資金面で飛躍的に進展し、技術の進歩はさらにそれを後押ししました。

こうして十七世紀以来三百年以上続いていた山地の荒廃、森林の衰えは押しとどめられ、ついにそれは森林の劇的な回復へと導いてゆくことになったのです。

次に忘れてならないのが、一九六〇年代から始まったエネルギー革命(新炭↓石炭↓石油↓天然ガス)と肥料革命(化学合成された窒素・リン酸・カリ肥料の使用)です。地下資源の利用は、里山・森林に依存していた農業と暮らしのあり方を根本的に変えるものでした。それまで二千年以上も続いた日本の稲作農業を介した里山との密接な結びつきはなくなりました。人間の利用を受けなくなった里山の植生はその後、生態遷移の法則にしたがって奔放に変化し始めました。かくして草地には樹木が侵入し、森の樹木はかつてない勢いで成長し始めたのです。

林業界の事情が、さらに森林の回復を後押ししました。拡大造林政策は林業基本法の制定されたころを頂点に、わが国の木材供給と経済発展に貢献したのですが、それでも木材の供給は充分ではなかった。そこで外材の輸入が始まり、やがて自由化されたため、安価な外材への依存はたちまち国産材

森林依存からの脱却―森林飽和へ

「森林飽和」著者の太田猛彦教授。木材・合板博物館学びのコーナーで



シリーズ
特別企画
《第3回》

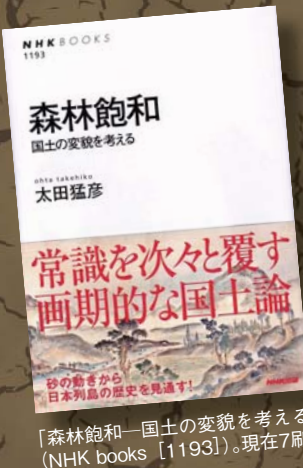
NHK books

森林飽和

国土の変貌を考える

著者

太田猛彦教授に聞く



「森林飽和―国土の変貌を考える―」(NHK books [1193])。現在7刷

◎森と木と人間の関係史についての一考

人間と森林の関係史に、今こそ新たなパラダイムの転換を

《第3回》「護る森」と「使う森」―林業再生と木材利用はいかにあるべきか 新しいパラダイムへの転換が求められている

「森林飽和」(NHK books)の著者太田猛彦教授に聞くシリーズ第3回をお届けします。前号「第2回 森と人間の関係史―中世から近代まで、森を使い尽くした日本」では、古代から中近世を経て近代に至るまで、日本人がいかに深く森林・里山に関係し、その資源に依存して社会の営みをつくってきたのかを俯瞰しました。シリーズ最終回となる第3回では、かつてなく衰えたはずの森林と里山が今、「森林飽和」へと変貌した現代、真に持続可能な森林と人間の関係を造り出すため、私たちは今何をいかにすべきかを、語っていただきます。

森林荒廃をピークに導いた、明治維新の大変化

明治維新の大変化は山にも及びました。

その一つは、林野の所有形態の変化です。藩政時代の林野の所有は、大まかに藩有林(幕藩有)、村有林(村持)、民有林(個人有)とされていたのですが、山の管理や使用収益面では農民の自給的利用が主をなしており、その実態はたてまとは大きくかけ離れていました。その入り組んだ実態にみあった所有形態を定め直すまで、明治政府は長い時間を要したのです。明治二年の版籍奉還から、地租改正を経て、明治二十二年町村制移行に至るまでの間、林野の「官民有区分」は混乱を伴いながら進められざるを得ませんでした。この一時期を経て、今日に至る林野所有の大枠のあり方が決まりましたが、この混乱は乱伐もたらしました。

明治維新後のもう一つの大変化は近代産業の勃興です。政府は欧米との不平等な関係を一日も早く解消し肩を並べるため、積極的な殖産興業を推し進めました。近代産業の急速な進展は、産業都市の発達、人口の集中、鉄道等交通手段の改革、鉱物資源の採掘などを伴います。産業用燃料はまだ薪炭に依存する時代でしたし、建築資材の需要もまた森林資源への依存を一層深める要因となりました。

林野所有のあり方の混乱に加え、急速な近代産業化による資源需要は、森林の乱伐をもたらし、山地・森林は一層、荒廃を極めることになりました。明治時代の中期こそは、山地・森林の荒廃がピークに達したときだと言えます。

この頃頻発した豪雨災害は、こうした乱伐による森林荒廃の影響によるものです。豪雨による山崩れ、土石流が民家を襲い、民間からも防災工事が要望され、内務省(土木寮)は「砂防」の名による府県と合同の山腹工事を実施することにもなりました(二八七一年砂防法五箇条(民部省達第二号))。

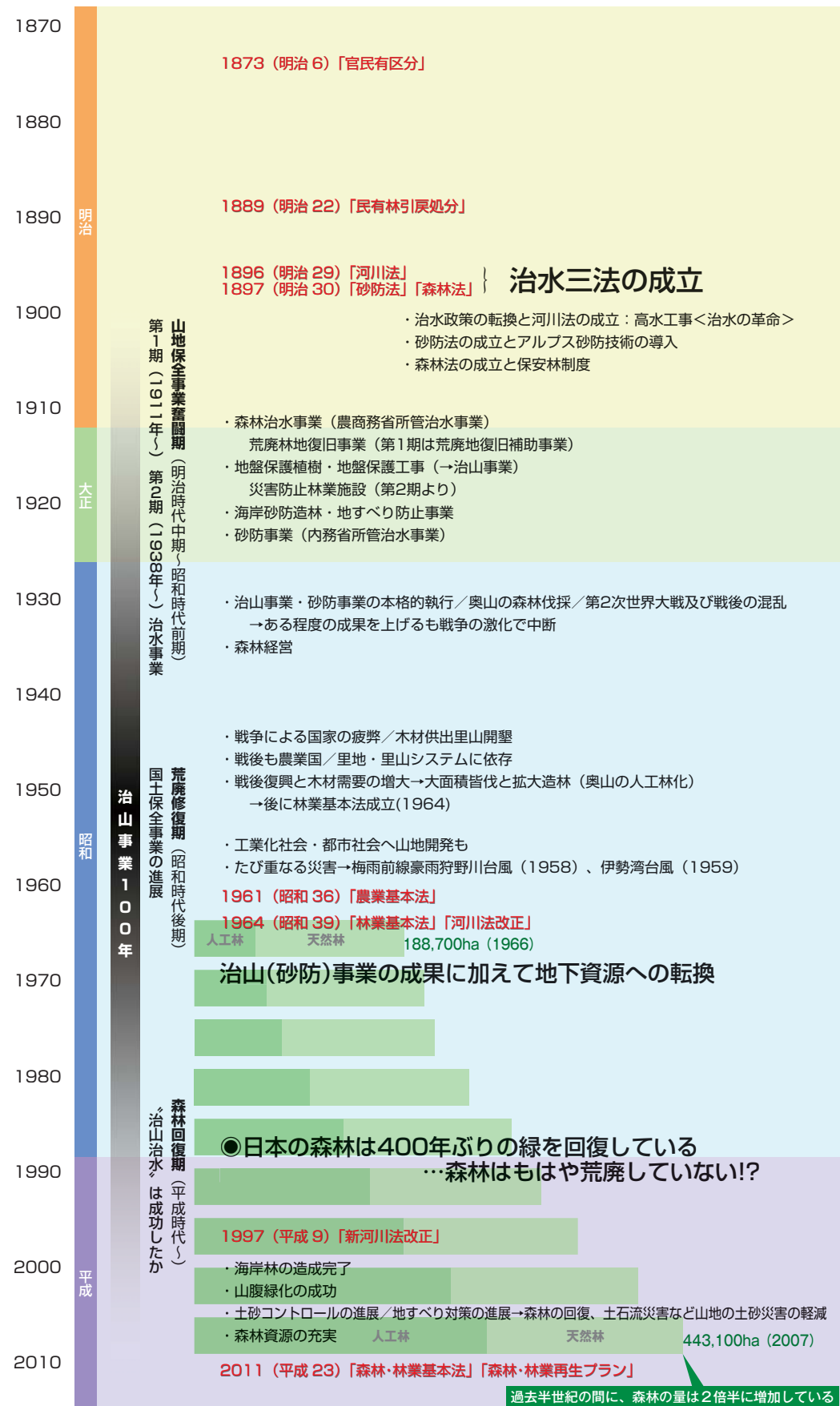


図3 治山事業100年を迎えて (「森林飽和」掲載の図及び太田氏提供による資料を参考に編集委員会で作成)

ているのも当然のことです。

「人工林の荒廃と林業の衰退」

人工林は本来、下刈り、除伐、間伐、枝打ち、つる切りなどの手入れを前提に植栽されたものであり、放置されれば荒廃するのは目に見えています。その原因が輸入材による林業の衰退にあるこ

とは前述したとおりです。もちろん、地下資源を原料とするいわゆる代替材の影響は言わずもがなのことです。

現在、国産材の価格 (材価) が五十年前の水準にまで落ちてきているのは、異常というほかありません (図2)。国産材の生産から得られる利益は非常に小さくなり、生産量が落ちて、五年ほど前ま

での日本の木材自給率は二〇％以下に過ぎませんでした。近年中国やインドなど途上国で木材の需要が急増したため我が国の自給率は少し上昇していますが、正常な林業経営を可能にするにはほど遠い現状にあります。林業不振の長く続いた結果、林業技術者が減少し高齢化していることも林業建て直しの障害となっています。

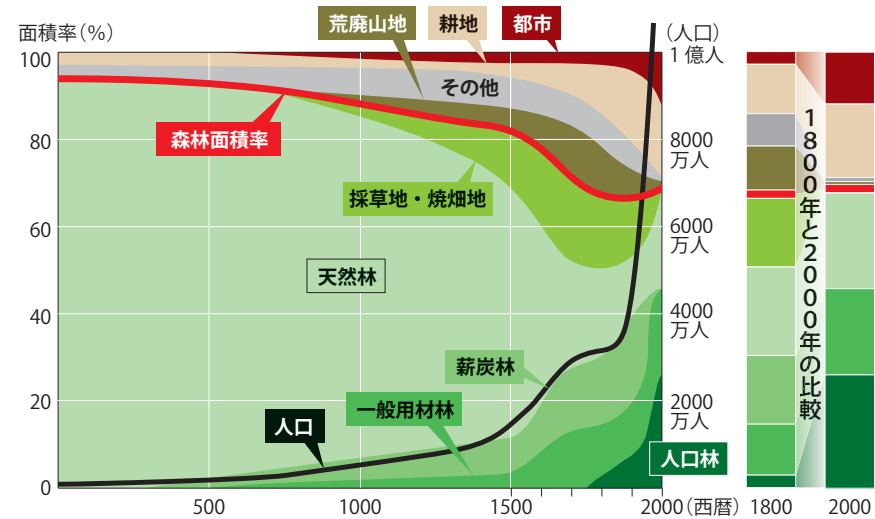


図1 森林利用及びその他土地利用の変遷 (森林飽和」掲載の図を参考に改編)

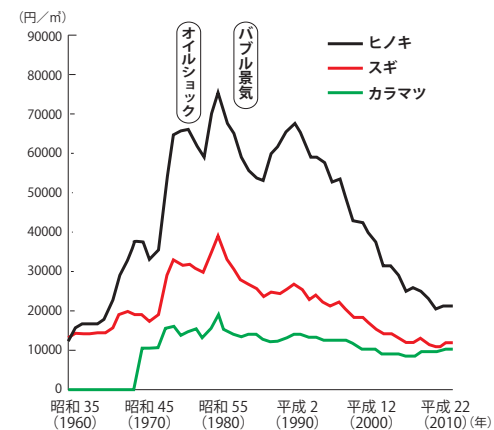


図2 国産材の材価の変遷

森林の量は増えましたが、だからと言って安心できるわけでは決してありません。

かつての里山は今どうなっているのか。道端から見える森は、名も知らぬ草や灌木が密生し、背丈以上のササで覆われ一歩も中へ入れない。懐かしい〴〵里山の風景とは大違いです。こうなるのもつともなこと、人はそれらを刈り取ったり伐ったりする必要もないのでそのままに放置しているだけで、草木はのびのびと成長しているに過ぎないのです。つまり今度は、かつて毎日のように人が入り込み木や草を採取していた森に入り込めなくなつて、「里山が荒れている」と言われる現状になっているのです。

ではスギ、ヒノキなど人工林はどうか。林業の衰退は、人工林を手入れする経費を捻出できず、

何が起きているのか——森林飽和の副作用

倍以上に増加しています。

こうして、日本の森林はわずか半世紀の間に劇的な変化を遂げ、現在日本の森林は四百年ぶりの豊かな緑に満ちています。今、私たちは日本の森林の極めてドラスチックな変化に直面しているのです。

「里山の奥山化」

里山は今どうなっているのか。里山の農用林や薪炭林は明治時代以来、スギ、ヒノキ、マツなどの人工林に少しずつ転換されていきました (初期の「拡大造林」) が、残された部分は前述のエネルギー革命、肥料革命が進んだ一九六〇年代以降、基本的には放置された状態になりました。里山の象徴だったコナラやクスギは大木になり、低木のアオキやヒサカキが目立つようになります。使われなくなった里山で照葉樹林が成長すると暗い森になります。いまや里山の一部と化している人工林も手入れが行き届かず薄暗くなり、人の立ち入りを阻んでいます。また、竹林がはびこり、里山を登り始め、過密になった放置竹林も各地で問題となつてきています。こうした生態遷移の進行はつまり、〴〵里山の奥山化〴〵を意味します。人が森林資源を利用しなくなれば奥山化が進むのは必然で、本来は奥山にいるはずの動物が里山まで出てきてしまうのも当然です。近年、シカやサル、ときにはクマまでが里山近くの住宅街に現れ

為ともみなせるのではないか。このことから、持続可能な社会では地上資源の源である現太陽エネルギーを最大限利用することが必要であるとした。主張しなかったのは、木材資源を利用することは、単にそれがカーボン・ニュートラルであるとか、化石燃料を代替するとかいう意味を超えて、もっと深い意味をもっているということでした。二つの森林原理をごく簡便に表に示してみましたが。ここでは例えば、木造住宅を建てるということ、木をぬくもりのある家に住みたいとか、林業を復興させて山村経済の活性化に役立つかかりでなく、地球温暖化防止にも役立ち、身近な花粉症対策にもなり得る、すなわち、私たちに身近

新しい森をつくる——「護る森」と「使う森」

森林の管理をより具体的に考える場合のキー概念として、森には「護る森」と「使う森」の二つがあることを明確に意識することが必要だと思います。（図5）

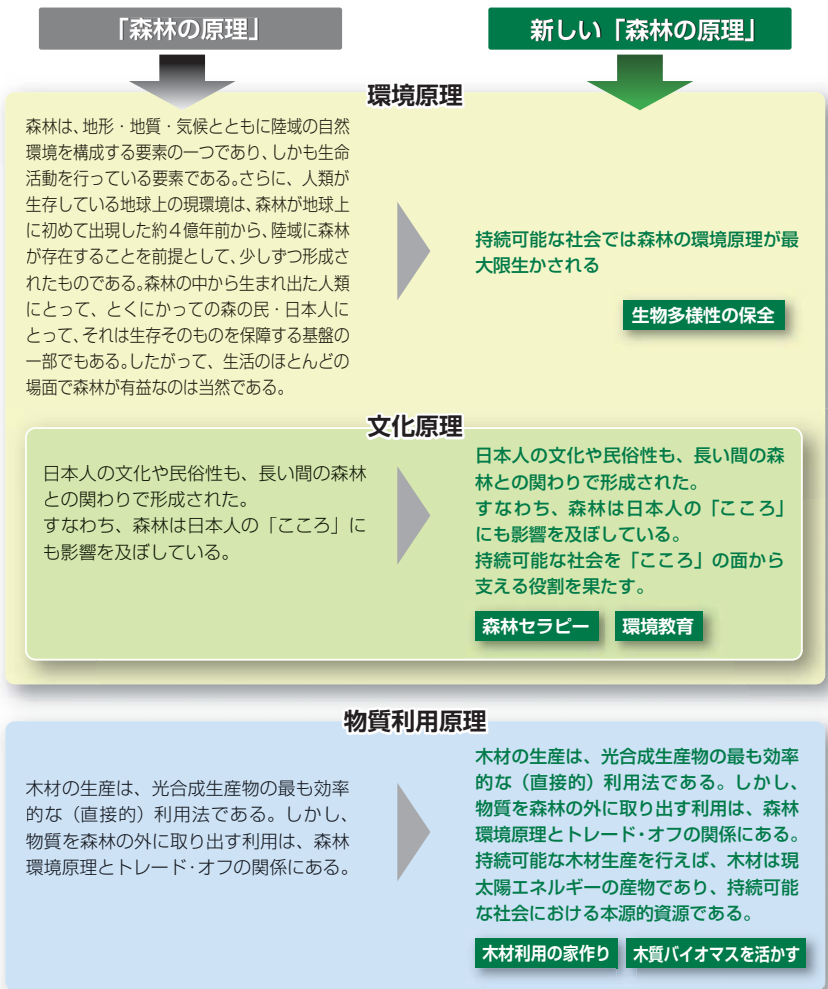


図4 森林の原理と、新しい森林の原理（「森林飽和」掲載の図を参考に作成）

念として、森には「護る森」と「使う森」の二つがあることを明確に意識することが必要だと思います。（図5）

【「護る森」】

「護る森」の第一は、生物多様性保全を必要とする貴重な動植物の棲む森です。すでに大半が森林生態系保護地域などに指定されています。護る基本は、その地域を護るだけでなく、これをコアゾーンとして、その周囲のバッファゾーンも併せて保存し、さらにそれを取り囲む人工林などの管理も第二のバッファゾーンとして役立つよう管理すべきです。

「護る森」の第二は、急斜面や高標高地に多い土砂災害を発生しやすい森です。多くは保安林に指定されていますが、人工林の中にそのような場所がある場合もあり、そうしたエリアは禁伐林とすべきです。

そして第三は、第二と同様の地域にある水源を護るための森で、ここでも原則伐採禁止が妥当です。

【「使う森」】

「使う森」は人工林です。ここでも常に森林の多面的機能を意識した取り扱いが必要です。森林・林業基本法第九条「森林所有者等の責務」にも明確に規定されていますが、このことは「森林・林業再生プラン」を実施する場合にも肝に銘じて欲しいところです。従来の水源林の大部分は森林が劣化していた時代に比べると、現在ではほぼ水源涵養機能を取り戻していると考えてよく、一方で成長した森は水を大量に消費します。したがってこうした森では積極的に木材生産も行うべきなのです。森林施業にあたっては林床の攪乱を最小限に抑えることが肝要なので、この原則を守れば災害を被る心配はいりません。

「使う森」の最後は、今は見放されている里山

【「自然林の放置と生物多様性の危機」】

奥山を中心とした自然林（天然林・天然生林）はどうか？ここでは異常繁殖したシカによる被害が深刻になっています。シカが下草や灌木を食べ尽くしてしまい、絶滅危惧種など貴重な動植物を絶滅寸前に追いやつてしまい、植生は残ってもシカの好まない種ばかりで構成される森となってしまう。森林の多様な生態系の保全は、人の手を必要としています。ここでは、「自然はそのまま放っておくのが一番良い」という考え方を捨てる必要があります。

量的には豊かだが、質的にはこのような問題を抱えた日本の森林。さて、私たちはこの日本の森林をどのように管理していくべきなのか？林業界では二〇〇九年に「森林・林業再生プラン」が提案され、二〇一一年から実行段階に入っています。

明治時代の近代化以降、日本の森林行政は三つの曲がり角を経験してきました。

第一は、一八九七年の国土保全政策の推進を柱とした**森林法**の制定で、これは前述の治水三法の一翼を担うものでした。

第二は、一九六四年の**林業基本法**の制定で、河川法改正（一九六四年）や農業基本法（一九六一年）とともに高度経済成長を支える役割を果たしました。

そして第三は、二〇〇一年の**森林・林業基本法**の制定です。これは、地球環境問題を克服して持続可能な社会の構築を主眼とする、まったく新しい概念を盛り込んだもので、河川事業に正式に環境保全事業を組み込んだ新河川法の改正（一九九七年）、農業・農村の持続可能な発展を目指す食料・農業・農村基本法とともに持続可能な社会をつくっていく法律です。なかでも、「森林整備の第一目的は森林の多面的機能の持続的な

発揮である」とした森林・林業基本法は、国民の要求に主導されてつくられたもので、その内容は画期的です。この法律の制定される三年前、当時二兆八千億円もの巨大赤字を抱えていた国有林経営が、国民の期待に応えるかたちで抜本的に改革され、この議論の延長上に森林・林業基本法は制定されたのです。

この枠組みのなかで、かえって埋没した感のある木材生産機能を立て直すものとして立案されたのが「森林・林業再生プラン」です。このプランは川上（木材生産）から川下（需要、まを含む、幅広い改革・活性化案で、さまざまな課題と困難を抱えながら現在、実施途上にあります。これはひとり林業だけに限る問題ではなく来るべき未来において、いかに持続可能な社会を築いていくのかという人类的課題のなかに位置づけられるものでなければなりません。

一例をあげてみましょう。今私たちを悩ましている花粉症は、拡大造林時代のつげが廻ってきたものです。かつて、拡大造林は林業をばら色に彩る事業でした。当時、そのスギ・ヒノキの造林が花粉症問題となって人々を悩ますことになるだろうなどとは誰も思ってもみなかったのです。では、その解決は？いまや壮齢期に達し、花粉を大量に飛ばしているスギ・ヒノキを使って木材生産を活発にし、その跡地に新たに花粉症の心配のない樹木を植え、有効な人工林をつくっていくことこそ、花粉症問題の究極的解決の道です。それは、森林と人間との持続可能な関係を築いていく、そうした取り組みと大きなビジョンのなかに位置づけられて意味と実効性を有するものとなるはずで。考えてみれば、私たち日本人はつい半世紀前まで森を頼りに生きてきました。森がなければ生きてこれなかっただけでなく、これだけの文化を築くことさえできなかった。その森の恵みをまったく放棄して、地下資源だけに頼ろうとするのもじ

つに極端に過ぎる転換と言えるのではないでしょう。かつての森林荒廃時代に戻ることなく、森林を適切に保存し、利用しながら暮らすことこそ縄文時代以来の森の民・日本人の伝統であり使命ではないかと、思うのです。

私の提案——森林の原理、新しい森林の原理

森林・林業基本法の制定に関連して、日本学術会議は農林水産大臣の諮問に対して、二〇〇一年に森林の多面的機能の評価等について答申ししました。私は答申の作成にあたり、森林の多面的機能を持続的に発揮させるための「森林と人間に関する『森林の原理』」を示し、これによって議論するよう提案し、採用されました。この原理は環境原理、文化原理、物質利用原理の三つのサブ原理からなり、たとえば森林の環境保全機能を地球環境史の中での森林の役割を含めて検討し、これに日本人の歴史的な森林との関わり方とも関係付けて考察しようとするものです。この視座は国連のミレニアム生態系評価で二〇〇四年に提案された生態系サービスの内容説明と一致するところも多い。つまり、二十一世紀の森林管理の原則すなわち「多面的機能の持続的な発揮」とは、それぞれ対立する要素を含んだ三つのサブ原理を同時にバランスよく発揮させ続けることにある、としたものです。

この後私は、地下資源を利用して築かれた現代文明の本質を森林の視点から考察し、「新しい森林の原理」を提案しました。ここでは、私たち人類が生きる地球表面の生物圏——地球表面のきわめて薄っぺらの空間——が、四十六億年に及ぶ地球環境の進化によって形成されてきた過程で、不必要なものとして地下に廃棄されたもの（閉じ込められたもの）が地下資源なのであり、したがって地下資源の利用は地球環境の進化の方向に逆行する行

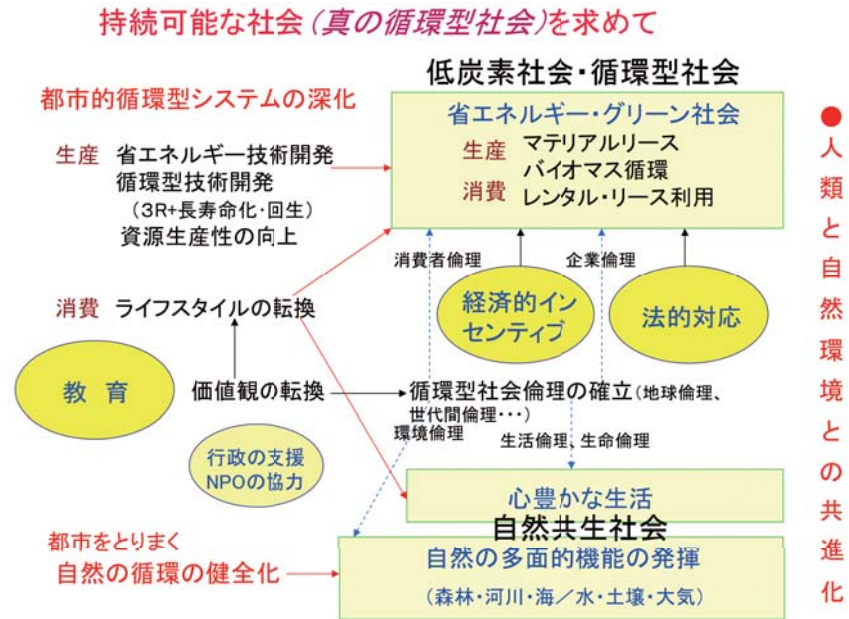


図7 持続可能な社会のイメージ

日本人は何千年にもわたって森を使い続けてきました。その森を地球環境に配慮した新たなコンセプトのもとで合理的に利用し育てて人類社会に貢献するのは、私たち日本人の務めでもあるのです。

※

これからの国土環境管理には、これから私たちが目指すべき持続可能な社会とは何かということ、また現代の日本社会が人口減少社会であることへの正しい認識の共有を必要とします。(図7)

私がここで述べてきたことは、国土と森を考えるうえでの基本認識にしかすぎません。きたるべき山地・森林のあり方についても、個人が提案する

森林、林業、木材生産（それに伴う文化）の今後のあり方については、さまざまな立場から意見が出され、また交わされています。本誌「木と合板」は、今後もさまざまな情報提供の企画を適宜こころがけ、この問題について読者の皆さんと共に考えていきたいと思います。

が更新され続けています。

※

具体案だけではおのずと手に余る問題であることは、もちろん承知のうえで持論を述べてきました。何千年にもわたる森林と人間との関係。これを抜本的に見直すべきときです。まさに新しいパラダイムが問われています。それには幅広い議論知見の集約、大きなコンセンサス獲得への粘り強い努力、行政民間の一体となった力が必要ですよ。拙著「森林飽和」が、その一助となればこれに勝るものはありません。

【シリーズ終回にあたって】編集委員会

このシリーズ企画「太田猛彦教授に聞く（全3回）」は、太田猛彦先生への2度のインタビュー及び先生の著書「森林飽和」に拠っています。太田先生は森林水文学、砂防工学、森林環境学を専門とされ、著書「森林飽和」は国土環境、国土防災の視点から、現象をひろく取り扱って論じられています。特に防災上の大問題である土砂災害等については、大きな比重で語られています。

今回シリーズ企画は、このなかから主に森林・林業に関係する部分にフォーカスした内容であることを、読者の皆さんにおことわりしておきます。

関心がおありの方にはぜひ書店で本書を手にとって下さい。また、先生ご自身の手になる「太田猛彦ホームページ」では先生の新たな提言、解説が更新され続けています。

※

を役に立つ森に変えることです。森林セラピーの森、レクリエーションの森、教育の森などとして、利活用した残りは木材生産林として循環利用し、低炭素社会に貢献すべきです。(図6)

このように森にはそれぞれ適切な活かし方があることを知ったうえで、当該地域の森の特徴を科学的に調査し、「森林の機能の階層性」に考慮しながら、関係者の合意形成を経て例えば市町村森林整備計画上で森のゾーニング(区分)を行い、各々適切な施策を実施していくこととなります。

低炭素社会に貢献すべきです。(図6)

ここでいう「森林の機能の階層性」とは、ある森林にどのような機能を発揮させるかを考えるとき、私たちの自由意志で決められるわけではなく、立地条件によっておのずと発揮させるべき機能の順番が決まっていることを言います。

森林と人間の関係 求められる新パラダイム
—— 歴史的発想の転換 ——

また、これからの森林管理には、そのすべてを

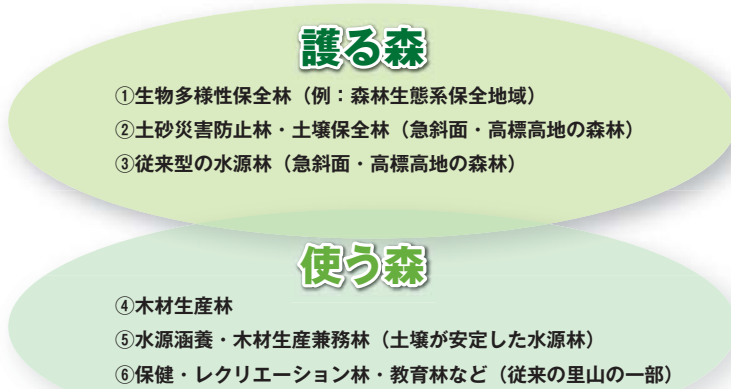
森林と人間の関係 求められる新パラダイム —— 歴史的発想の転換

また、これからの森林管理には、そのすべてを

ふたたび私たちの役に立つ森づくり

・具体的な森林管理の枠組み

- ▶まず、都市域を含め、あらゆる場所でみどりを増やす
- ▶「護る森」と「使う森」を意識して、流域圏の森林をゾーニング（地域区分）し、それぞれで適切な管理をおこなう



- ▶ 森林の機能の“階層性”を考慮してゾーニングする
- ▶ 水源林、里山の“森林”などで使う森を拡大する



図5 具体的な森林管理の枠組み

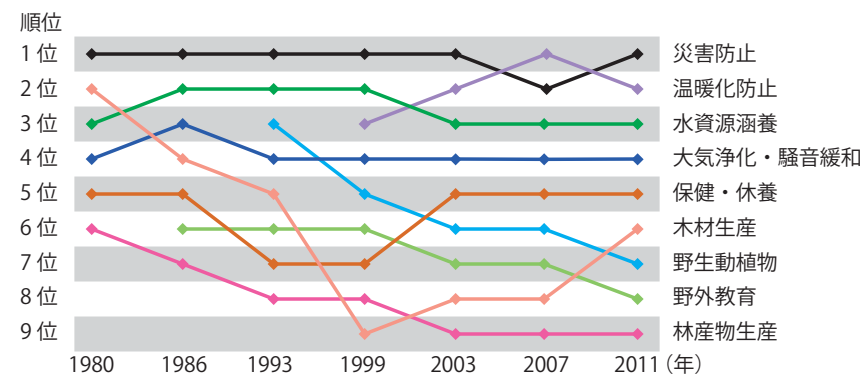


図6 国民が森林に期待する働き



太田猛彦氏のプロフィール

【略歴】 1941年 東京都生まれ
1971年 東京大学農学部林学科卒業
1978年 同大学院農学系研究科修了（農学博士）、東京大学農学部助手
1980年 東京農工大学農学部講師
1985年 同助教教授
1990年 東京大学農学部教授
2003年 東京大学名誉教授、東京農業大学地域環境科学部教授

【元職】 日本学術会議会員、日本森林学会会長、砂防学会会長、日本緑化工学会会長、水文・水資源学会副会長、林政審議会委員、東京都森林審議会会長など
【現職】 FSCジャパン議長、かわさき市民アカデミー学長など

主な著書／「森林飽和」、「農林水産業の技術者倫理」(編著)、「森林の機能と評価」(分担執筆)、「宮川環境読本」(編著)、「水の事典」(編著)、「森と水と土の本」、「溪流生態砂防学」(編著)、「水と土をはぐくむ森」など

[illegible]



大工さんが家を建てています。いくつもの大工道具が巧みに使いこなされ、カンナ屑からは木の香が匂いたち、仕事ぶりに無心に見入る子どもがいます。かつて日本のどこでも見られた光景でした。ある世代から上の人たちには懐かしく蘇る記憶です。

今はそんな風景も遠い過去となり、住宅建築現場からはわずかに電動釘打機の音が聞こえてくるぐらいです。あれらの大工道具はいつの間に、どこに消えたのでしょうか。鉄筋コンクリート造の集合住宅が一般的となり、日曜大工の道具すら姿を消した家庭も少なくありません。

そんな大工道具のもつ世界に、深く魅せられた人がいます。日本近代建築史の碩学、故村松貞次郎氏（※1）です。

「現実には亡びつつある道具をそのままにしておいてよいのか。それはたんに古い生産様式の時代に属する遺物ではない。物をつくる、生産する、ということの意味が、資源の大量消費、産業公害の激しい発生の中で根本的に問われているとき、道具を見直し、その歴史を検討することによって、われわれはその問いに対する何らかの解答をつることができるのではないだろうか。

新しく、手に心に再び道具を持ち直してみる必要はないだろうか。そのためには、道具を忘れてはならないし、ましてや亡びさせてはならない、と私は思っている。」（村松貞次郎著『大工道具の歴史』岩波書店）

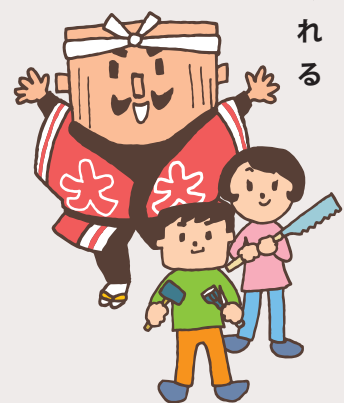
日本の建築を語るうえで欠かせない大工道具の歴史。神戸にある公益財団法人竹中大工道具館は、そんな古今の大工道具を一堂に集めた、日本で唯一の博物館です。ここではさまざまな大工道具が、万華鏡のように豊かで奥深い世界を見せてくれます。

夏の特集―竹中大工道具館で学ぶ

たいせつなことは、大工と道具が教えてくれる

道具の王者、大工道具が魅せる万華鏡の世界

ものづくりの技、匠、心を、未来に伝える博物館



竹中大工道具館は、東海道・山陽新幹線「新神戸」駅から歩いて3分、神戸市中央区熊内町にあります。和風の門構えの前に立つと、大工道具館の屋根ごしに六甲山塊の深い緑が迫り、新幹線の駅近くとは思えない閑静な佇まいです。

枯山水の庭園に囲まれた地上1階建て、地下2階の建物は、伝統を感じさせる和風の趣。玄関ロビーは、ほかに木の香が漂う、癒しの空間です。

館長に就任される前は、竹中工務店で設計畑を長く歩いてこられたという赤尾建藏氏に、お話を伺いました。

このままでは、日本の大工道具が消えてしまう

―大工道具館設立の由来からお話いただけますか？

竹中大工道具館は1984年に神戸市中山手に誕生しました。この地に移転し

点を集めました。現在コレクションは約3万7百点を数えるに至りました。今は一般には現存しなくなったものもあります。

宮大工から始まる創業ルーツ

竹中工務店の沿革は、慶長15年（1610年）初代竹中藤兵衛正高が名古屋で創業した宮大工から始まります。明治32年（1899年）に神戸に進出して事務所を構えたのが、大工道具館旧館のあった神戸市中山手です。竹中工務店創立85周年記念事業として、昭和59年（1984年）に企業博物館で出発し、5年後の平成元年（1989年）財団法人の設立許可を得て正式に登録博物館となりました。平成24年（2012年）に公益財団法人竹中大工道具館となり、今の場所に新館をオープンしたのが2014年です。この土地はもともと竹中家の本宅で、後に竹中工務店の厚生施設として使われていたものを寄付していただきました。

当館のスピリットは、竹中練一前会長と『道具曼荼羅』（※2）を著された故村松貞次郎先生が懇意だったこともあり、先生のお考えに負っているところが大きいと思います。

現在、展示されているのは3万7百点のうち約1千点。展示していない道具は約2万9千7百点余。展示だけでなく、この保存も私たちの大切な仕事です。刃物ですから時とともに錆びたり、刃こぼれなども避けられない。しかし、そうならないよう、全て入念に手入れし収蔵庫に保管しています。名品ほど使い込まれたものが多く、元の形を残すギリギリの

新館としてリニューアルオープンしたのは2014年です。

日本に電動工具が登場したのが今から60数年前です。それまではずっと手道具の時代でした。このままでは日本の手道具が消えていってしまうのではないかと危惧したのが、私も竹中工務店先代会長の竹中練一です。手道具を使う大工さんの精神、それをつくる道具鍛冶、その技と心を後世への民族遺産として遺さなくてはならない……ということで大工道具の博物館をつくることになりました。

しかし、私どもは肝心の大工道具は持っていないからです。企業博物館といえば、製品展示など業績のコレクションが並べられるものです。私どもは建築物はつくれても、大工道具のコレクションはなかった。そこで一念発起、全国の本支店が手分けして5年間を費やして大工道具の蒐集に取り組み、このとき約1万

研ぎ出しをしています。いいものになると、1日に研げるのはせいぜい3本くらい。人手のかかる仕事です。

収蔵品のなかには映像資料も含まれています。手道具は使い手とともに消えていく運命にありますから、それがどのようにに使われていたかを示す映像は貴重な資料です。当館では、道具とともに映像も見ていただくスタイルにしています。現在は大工道具以外の、桶屋、船大工、屋根職人、左官屋さんなどの道具も、また海外にも蒐集対象を拡げています。ドイツなどでは電動工具なども展示していますが、私どもの蒐集対象は手道具に限っています。

「伝統と革新」新旧の技術が一体となった新館



新館の設計にあたっては、外観内装ともに伝統的な建築技術を盛り込んだ造りをこころがけました。建物は展示スペースとしてフロア空間を3階分確保する一方、その周囲は可能な限り枯山水づくりの植栽を残しています。かつての本宅周囲にあった庭園樹木の一本一本を図面上に落とし込み、最も木を伐らなくてもいい方法をあらゆる角度からシミュレーションしました。その結果、もとの本宅は2階建てだったのですが、費用が高むことは承知の上で、地下2階に掘り下げ、地上1階としました。

「和」の伝統を感じていただける建物というコンセプトから、当初の構想は木造でしたが、ここは防火地域に指定されていて耐火構造にする必要がありました。伝統と革新の技が一体となった造り



1階ホール。この日は、企画展「木と共に生きる一木地師 小椋榮一の仕事―」。左隅に見えるテーブルと椅子。椅子は16脚あり、それぞれ近畿地方の木工作家さんたちの作品。



赤尾建藏館長。竹中工務店で設計畑の道を経て、竹中大工道具館館長に。終始、穏やかな笑顔で、大工道具館への思いとこだわりを語っていただきました

※1 村松貞次郎：(1924～1997)建築史家。静岡県生まれ東京大学卒。東京大学名誉教授。技術史を基に近代建築を調査・研究し、日本の近代建築史学を確立した。著「日本建築技術史」など。（三省堂「大辞林」）（以下、編集部加筆）1983年、日本建築学会賞受賞。1991年、明治村館長。著書『大工道具の歴史』（1973年 岩波書店）で毎日出版文化賞。（編集委員会）

※2 『道具曼荼羅』：（文：村松貞次郎 写真：岡本茂男）（1976年毎日新聞社）。後、同共著で『新道具曼荼羅』、『続道具曼荼羅』など。

※3 パラリ仕上げ：漆喰仕上げの手法の一つ。漆喰中に粒状の石灰を入れて塗りつける。乾燥後、壁表面に粒状の凹凸が浮き上がり、風趣をなす。桂離宮のほか京都御所等にも使われている。（編集部）

※4 版築壁：土壁や建築の基礎部分を強くするための古来から伝統的工法。材料に土や石などを混入して突き固める。（編集部）



数寄屋づくりの茶室のスケルトン実物大模型。数寄屋づくりの内部が覗けます。モデルは京都の大徳寺玉林院の蓑庵(さあん)



「大工と雀は軒で泣く」といわれるほど、大工の苦労どころといわれる屋根の軒廻り箇所 の模型



「式尺の墨かね」「算合」「手仕事」「絵用」「彫物」。江戸時代の大工には多方面の技術と才能が求められていたことを示す「五意達者」の展示



地下1階～2階の吹き抜けに設置された唐招提寺金堂組物の実物大模型。木造建築の迫力に圧倒されます

です。モダンに見えながらも、日本の伝統を堪能していただける職人技が散りばめてあります。建物外壁は京都の聚楽土を混ぜた漆喰塗り、内側は桂離宮と同じバリ仕上げ(※3)、屋内は版築壁(※4)イメージの土壁削出し、屋根は淡路のいぶし瓦のむくり屋根(※5)です。

1階ホールは中に柱のない大空間にするため、構造材に鉄骨を用いています。が、出来るだけ鉄の存在を感じさせない工夫を凝らしました。構造設計上、上部が鉄骨造では柱が太くなってしまう、また竹中工務店が認定をとっている被覆の耐火式柱では大き過ぎてスケールアウトになってしまふ。そこで、天井部の構造材はパイプで軽量化し、それに計算上見合う限りの細い鉄柱で支えながら、鉄とは思えない演出をしています。天井はスギの無垢材を使った木組みの船底天井です。

出来る限り伝統の技を用いたい、しかしそれが出来ないところは最新の構造技術も駆使する。「伝統と革新」のコンセプトは、苦肉の策の要素も含んでいます(笑)。他にもドアや案内サインなど細かなところにも職人技の工夫が凝らされています。来館者の方には、そんなところも見えていただきたいですね。

新館リニューアルにあたって幸運だったのは、設計者と運営者が離れた存在ではなく一体であったことです。私自身が竹中工務店で設計畑を歩いてきた経験があり、一方博物館を十年やってきていたので、来館者の皆さんにどうお見せすればいいのか、ということに私なりのこだわりがありました。旧館の展示は物を置いているだけという印象が強く、展示

でもありたい。そういう意味での多目的ホールでもあります。

「千年の釘」の出張授業

これまで、北は北海道から南は九州まで巡回展をやってきました。おかげでいぶ認知されるようになり、入館者数も増えています。私が着任した10年前は年間6千人ぐらいでしたが、今は1万1千人ぐらいです。展示資料も増えてきてスペースが手狭になってきたことも新館リニューアルのきっかけですが、じっとしてただけでしたら前の場所に居続けていたでしょう。やはりこれまでの活動が実を結んだ成果だと思っています。

2カ月1回のペースでセミナーを開催してきてこの9月で70回目を迎えます。最初の講師は私が務めました。私でも出来るんだということから次第に館のスタッフも乗り気になって(笑)。最初の参加者は40人ぐらいでしたが、今は80人ベ

ース、しだいに容量が足らなくなってきました。

小学校4年生以上を対象にした出張授業もしています。小学校5年生の国語科の教科書(光村図書出版(株)発行)に、内藤誠吾さん(※6)が書かれた「千年の釘にいどむ」と題する文章が載っています。法隆寺昭和修理の棟梁として知られた西岡常一氏(※7)から釘づくりを任された、鍛冶師の白鷹幸伯さん(※8)が試行錯誤を重ねて「古代の釘」の復元に挑んだ話です。この「千年の釘」は当館に収蔵されています。この釘を教室に持って行って、実際に見て触れてもらいます。白鷹さんの制作の様子を撮ったビ

デオ映像もあるので見てもいい、当館の研究員が先生になって授業をします。

今の子どもたちは、木の匂いを知りません。カンナを知らない子もいます。家を建てる材料の多くはプレカット製品で、そういうものと思い込んでいる子もいます。大工さんが家を建てているビデオ動画や、カンナやノコギリを持っていて使い方を見てもらいます。子どもたちの眼がきらきらしてくるのを見るのは、いいものです(笑)。出張授業は年に24校ぐらい実施しています。「大工さんになりたい」アンケートの作文に1割くらいの子が書いてきます。ついでは大工道具館に行きたいということにもなっています。これも出張授業の成果です。

大学や工業高校などの授業でも活用していただいていて、年に60校ぐらいが来館します。

手と体で知る、ものづくりの奥深さと楽しさ

出張授業を始める前は、兵庫県の校長先生たちに大工道具館への招待をダイレクトメールでご案内していました。けれども、バス代の費用とか事故の可能性とかリスクの心配もあって、なかなか足を運んでもらえない。それなら、こちらから伺いますと始めたのが出張授業です。ダイレクトメールにも校長先生たちからの返事がなかなかありません。調べてみると、先生たち自身が、ものづくりに興味をお持ちでないことがわかりました。図工や技術の先生がものづくりに関心があるかないかも肝心なところ。そこで、20人ぐらいの先生をお誘いして、

解説パネルも文字が多すぎました。新館は、五感で感じていただける博物館をめざしました。インスピレーションが誘われるような感じにできればいいなど。

地下1階から地下2階を吹き抜けるスケールを感じてほしいからです。地下2階の茶室はスケルトンで数寄屋づくりの何であるかを内部構造も見ただけです。京都の大徳寺玉林院の蓑庵(さあん)の写しで、実物は地上庭園にあります。年2回、春と秋に一般公開していて、呈茶もたしなんでいただけの趣向です。

「木の技」をひろく伝える、ニユートラルな発信空間

1階は多目的ホールで2百人収容可能です。木工作家のグループ展や個展など企画展示に使っています。スクリーンもあるので講演会やセミナー会場としても使用可能です。

長谷木さんから寄贈いただいた天板のテーブルと、それぞれ違う意匠の椅子を16脚、設置しています。これらの椅子はすべて近畿地方の木工作家さんたちの作品で、私が探し廻ってコンペをしました。作家さんたちから「置かせてもらえるんですか?」と喜んでいただいて、36人ぐ

らいの応募がありました。残念ながら選外になられた方には謝りにいきました。テーブルには、作家さんのプロフィールと連絡先を紹介したファイル綴じを置いています。技術をもちながら機会に恵まれない作家さんたちを応援する発信基地

です。木工作家のグループ展や個展など企画展示に使っています。スクリーンもあるので講演会やセミナー会場としても使用可能です。

長谷木さんから寄贈いただいた天板のテーブルと、それぞれ違う意匠の椅子を16脚、設置しています。これらの椅子はすべて近畿地方の木工作家さんたちの作品で、私が探し廻ってコンペをしました。作家さんたちから「置かせてもらえるんですか?」と喜んでいただいて、36人ぐ

らいの応募がありました。残念ながら選外になられた方には謝りにいきました。テーブルには、作家さんのプロフィールと連絡先を紹介したファイル綴じを置いています。技術をもちながら機会に恵まれない作家さんたちを応援する発信基地

です。木工作家のグループ展や個展など企画展示に使っています。スクリーンもあるので講演会やセミナー会場としても使用可能です。

長谷木さんから寄贈いただいた天板のテーブルと、それぞれ違う意匠の椅子を16脚、設置しています。これらの椅子はすべて近畿地方の木工作家さんたちの作品で、私が探し廻ってコンペをしました。作家さんたちから「置かせてもらえるんですか?」と喜んでいただいて、36人ぐ

らいの応募がありました。残念ながら選外になられた方には謝りにいきました。テーブルには、作家さんのプロフィールと連絡先を紹介したファイル綴じを置いています。技術をもちながら機会に恵まれない作家さんたちを応援する発信基地

です。木工作家のグループ展や個展など企画展示に使っています。スクリーンもあるので講演会やセミナー会場としても使用可能です。

長谷木さんから寄贈いただいた天板のテーブルと、それぞれ違う意匠の椅子を16脚、設置しています。これらの椅子はすべて近畿地方の木工作家さんたちの作品で、私が探し廻ってコンペをしました。作家さんたちから「置かせてもらえるんですか?」と喜んでいただいて、36人ぐ

らいの応募がありました。残念ながら選外になられた方には謝りにいきました。テーブルには、作家さんのプロフィールと連絡先を紹介したファイル綴じを置いています。技術をもちながら機会に恵まれない作家さんたちを応援する発信基地

です。木工作家のグループ展や個展など企画展示に使っています。スクリーンもあるので講演会やセミナー会場としても使用可能です。

長谷木さんから寄贈いただいた天板のテーブルと、それぞれ違う意匠の椅子を16脚、設置しています。これらの椅子はすべて近畿地方の木工作家さんたちの作品で、私が探し廻ってコンペをしました。作家さんたちから「置かせてもらえるんですか?」と喜んでいただいて、36人ぐ

らいの応募がありました。残念ながら選外になられた方には謝りにいきました。テーブルには、作家さんのプロフィールと連絡先を紹介したファイル綴じを置いています。技術をもちながら機会に恵まれない作家さんたちを応援する発信基地

です。木工作家のグループ展や個展など企画展示に使っています。スクリーンもあるので講演会やセミナー会場としても使用可能です。

長谷木さんから寄贈いただいた天板のテーブルと、それぞれ違う意匠の椅子を16脚、設置しています。これらの椅子はすべて近畿地方の木工作家さんたちの作品で、私が探し廻ってコンペをしました。作家さんたちから「置かせてもらえるんですか?」と喜んでいただいて、36人ぐ

らいの応募がありました。残念ながら選外になられた方には謝りにいきました。テーブルには、作家さんのプロフィールと連絡先を紹介したファイル綴じを置いています。技術をもちながら機会に恵まれない作家さんたちを応援する発信基地

です。木工作家のグループ展や個展など企画展示に使っています。スクリーンもあるので講演会やセミナー会場としても使用可能です。

長谷木さんから寄贈いただいた天板のテーブルと、それぞれ違う意匠の椅子を16脚、設置しています。これらの椅子はすべて近畿地方の木工作家さんたちの作品で、私が探し廻ってコンペをしました。作家さんたちから「置かせてもらえるんですか?」と喜んでいただいて、36人ぐ

らいの応募がありました。残念ながら選外になられた方には謝りにいきました。テーブルには、作家さんのプロフィールと連絡先を紹介したファイル綴じを置いています。技術をもちながら機会に恵まれない作家さんたちを応援する発信基地

です。木工作家のグループ展や個展など企画展示に使っています。スクリーンもあるので講演会やセミナー会場としても使用可能です。

長谷木さんから寄贈いただいた天板のテーブルと、それぞれ違う意匠の椅子を16脚、設置しています。これらの椅子はすべて近畿地方の木工作家さんたちの作品で、私が探し廻ってコンペをしました。作家さんたちから「置かせてもらえるんですか?」と喜んでいただいて、36人ぐ

らいの応募がありました。残念ながら選外になられた方には謝りにいきました。テーブルには、作家さんのプロフィールと連絡先を紹介したファイル綴じを置いています。技術をもちながら機会に恵まれない作家さんたちを応援する発信基地

です。木工作家のグループ展や個展など企画展示に使っています。スクリーンもあるので講演会やセミナー会場としても使用可能です。

長谷木さんから寄贈いただいた天板のテーブルと、それぞれ違う意匠の椅子を16脚、設置しています。これらの椅子はすべて近畿地方の木工作家さんたちの作品で、私が探し廻ってコンペをしました。作家さんたちから「置かせてもらえるんですか?」と喜んでいただいて、36人ぐ

らいの応募がありました。残念ながら選外になられた方には謝りにいきました。テーブルには、作家さんのプロフィールと連絡先を紹介したファイル綴じを置いています。技術をもちながら機会に恵まれない作家さんたちを応援する発信基地

です。木工作家のグループ展や個展など企画展示に使っています。スクリーンもあるので講演会やセミナー会場としても使用可能です。

長谷木さんから寄贈いただいた天板のテーブルと、それぞれ違う意匠の椅子を16脚、設置しています。これらの椅子はすべて近畿地方の木工作家さんたちの作品で、私が探し廻ってコンペをしました。作家さんたちから「置かせてもらえるんですか?」と喜んでいただいて、36人ぐ

らいの応募がありました。残念ながら選外になられた方には謝りにいきました。テーブルには、作家さんのプロフィールと連絡先を紹介したファイル綴じを置いています。技術をもちながら機会に恵まれない作家さんたちを応援する発信基地

です。木工作家のグループ展や個展など企画展示に使っています。スクリーンもあるので講演会やセミナー会場としても使用可能です。

長谷木さんから寄贈いただいた天板のテーブルと、それぞれ違う意匠の椅子を16脚、設置しています。これらの椅子はすべて近畿地方の木工作家さんたちの作品で、私が探し廻ってコンペをしました。作家さんたちから「置かせてもらえるんですか?」と喜んでいただいて、36人ぐ

らいの応募がありました。残念ながら選外になられた方には謝りにいきました。テーブルには、作家さんのプロフィールと連絡先を紹介したファイル綴じを置いています。技術をもちながら機会に恵まれない作家さんたちを応援する発信基地

です。木工作家のグループ展や個展など企画展示に使っています。スクリーンもあるので講演会やセミナー会場としても使用可能です。

長谷木さんから寄贈いただいた天板のテーブルと、それぞれ違う意匠の椅子を16脚、設置しています。これらの椅子はすべて近畿地方の木工作家さんたちの作品で、私が探し廻ってコンペをしました。作家さんたちから「置かせてもらえるんですか?」と喜んでいただいて、36人ぐ

らいの応募がありました。残念ながら選外になられた方には謝りにいきました。テーブルには、作家さんのプロフィールと連絡先を紹介したファイル綴じを置いています。技術をもちながら機会に恵まれない作家さんたちを応援する発信基地

です。木工作家のグループ展や個展など企画展示に使っています。スクリーンもあるので講演会やセミナー会場としても使用可能です。

長谷木さんから寄贈いただいた天板のテーブルと、それぞれ違う意匠の椅子を16脚、設置しています。これらの椅子はすべて近畿地方の木工作家さんたちの作品で、私が探し廻ってコンペをしました。作家さんたちから「置かせてもらえるんですか?」と喜んでいただいて、36人ぐ

らいの応募がありました。残念ながら選外になられた方には謝りにいきました。テーブルには、作家さんのプロフィールと連絡先を紹介したファイル綴じを置いています。技術をもちながら機会に恵まれない作家さんたちを応援する発信基地

です。木工作家のグループ展や個展など企画展示に使っています。スクリーンもあるので講演会やセミナー会場としても使用可能です。

長谷木さんから寄贈いただいた天板のテーブルと、それぞれ違う意匠の椅子を16脚、設置しています。これらの椅子はすべて近畿地方の木工作家さんたちの作品で、私が探し廻ってコンペをしました。作家さんたちから「置かせてもらえるんですか?」と喜んでいただいて、36人ぐ

らいの応募がありました。残念ながら選外になられた方には謝りにいきました。テーブルには、作家さんのプロフィールと連絡先を紹介したファイル綴じを置いています。技術をもちながら機会に恵まれない作家さんたちを応援する発信基地

です。木工作家のグループ展や個展など企画展示に使っています。スクリーンもあるので講演会やセミナー会場としても使用可能です。

長谷木さんから寄贈いただいた天板のテーブルと、それぞれ違う意匠の椅子を16脚、設置しています。これらの椅子はすべて近畿地方の木工作家さんたちの作品で、私が探し廻ってコンペをしました。作家さんたちから「置かせてもらえるんですか?」と喜んでいただいて、36人ぐ

※6 内藤誠吾:1967年、東京都生まれ。NHKテレビディレクターを務め、主な番組に「人間ドキュメント」など。(編集部)

※7 西岡常一:(1908~1995)宮大工。祖父西岡常吉、父西岡橋光は法隆寺の宮大工棟梁。1956年に法隆寺文化財保存事務所技師代理。明王院五重塔、法輪寺三重塔、薬師寺金堂、同西塔などの再建を棟梁として手掛けた。文化功労者。「最後の宮大工」と呼ばれた。

※8 白鷹幸伯:(1935~)愛媛県松山市生まれ。土佐鍛冶の流れをくむ鍛冶職人の家に生まれ、父の向榎(先手)として9歳から鍛冶修業を始める。1971年、西岡常一棟梁と出会い、薬師寺再建のための和釘の鍛造を手がけた。著書に「鉄、千年のいのち」(草思社)



大工道具館は道具だけでなく、大工の技術がどのように伝授されたかの資料も豊富です。その一つ、大工さんの当時の教科書



和釘と洋釘の比較。左2本が和釘で、薬師寺西塔に使われた古代の釘の復元品。重さ、形、手触りなど、手に触れてみる事が出来ます。



ヨーロッパの大工道具。この他、中国の大工道具も紹介されています



ノコギリは基本の大工道具 種類別、目立て別、さまざまな角度から展示説明がされています



法隆寺五重の塔の模型

※5 むくり屋根:屋根の面を曲面、わずかに球面状の勾配にした屋根。数寄屋や茶室に多く用いられる。桂離宮など、軒先近くになるほど勾配が急になるので、雨水が早く落ち、腐蝕を防ぐ機能もある。反対にそり屋根は寺社仏閣、城郭に多く用いられている。(編集部)

竹中木工道具館「大人のための木工教室」



講義も実技も、山下先生のお話は退屈知らず。1日はあっという間です。

さりげなくも奥深い 道具を手にして学ぶ、ものづくり体験

竹中木工道具館では、講義型や体験型のたくさんのイベント・学習メニューが用意されています。子どもたちに人気なのが「ちょこっと木工」。木工技術のステップアップを目指す人には「大人のための木工教室」があります。講師は、島根大学名誉教授で木育インストラクターの山下晃功先生。アシスタントは木工道具館スタッフで宮大工の北村さん、博物館学が専門の大村さんのお二人です。【角材編】【板材編】の2コースがあり、【板材編】では板材から整理箱を作りながらカンナやノコギリなどの正しい使い方を学びます。私たちが教室生の皆さんと一緒に、二日間の聴講体験をしました。

教室生の皆さんは、自作を孫にプレゼントしたいという人、生まれて初めて木工道具を手にする女性、なかには高校で木工を教えているという現役の先生まで、さまざまです。山下先生は軽妙な話術で皆を沸かせます。引っ込み思案な人も、寡黙なお父さんも、いつの間にか一人残らず一緒に学ぶ仲間の輪が出来ていました。

ノコギリの使い方、教室生から質問が。「日本の鋸はどうして手前に引くんですか？」日本の大工仕事は伝統的に座り仕事が多かったこと、日本の材料の柔らかさ、日本人が求めた技術の繊細さなど、そのさまざまなわけを、宮大工の北村さんが教えてくれました。道具を手にして学ぶものづくりは、さりげなくも奥深い。木工道具館ならではの木工教室体験です。



宮大工の北村さん。正しいカンナ掛けの実演です



博物館学を学びにイギリス留学の経験もある大村さん。

山下晃功先生が 木育絵本をつくりました

絵本のマスコットキャラクター、ロボ木ー。竹中木工道具館の「ちょこっと木工」でも人気のメニューです。



「ロボ木ーと森」木育絵本シリーズ①です。



名工と誉れ高かった、千代鶴是秀氏の鍛冶場を実寸サイズで再現しています。再現されたディテールのリアルさに目をひかれます



大工道具の最盛期に標準一式とされた179点の道具。種類の多さが世界一。日本の木の文化の奥深さを感じさせられます



構造部位に応じた、丸太からの木取りの展示

は、「木」で出来るリフォームボランティアです。リフォームと言っても大掛かりなものではありません。高齢者のご夫婦、一人住まいの女性、障害をお持ちの方など、簡単な「木のリフォーム」に困っていらっしゃる方が多いはず。そこへ、人手はボランティア、材料は当館賄いということで、実費だけで派遣できる修理ボランティアはどうだろうかなどと思案しています。目下、実現してみたい、私のささやかな夢です。



教員研修を行い、ものづくりに挑戦していただきました。子どもたちの前に先生たちに関心を持っていただくこと。そこから当館のカリキュラムを見て、これは面白そうだなということで、お呼びがかかるようになって……。今では当館の研究員だけでは人手が足りなくなってボランティアさんも育てています。

ボランティアさんは三つのグループに分けています。一つは道具の手入れをしてもらう方。コレクションをAからEに分け、難易度に応じてボランティアさんに手入れを手伝ってもらいます。もう一つは解説のボランティアさん。当館でみっちり研修を受けた人達です。そして、館内でのワークショップや出張授業などをお手伝いいただくボランティアさんです。定年退職された方だけでなく女性、若い方もけっこういらっしゃいます。

力を入れているのが木工教室です。旧館では室内にブルーシートを敷いて、そこで座ってやっていたのですが、新館には新たに木工教室のスペースを設けました。「大人のための木工教室」、土日祝日には「ちょこっと木工」を開催しています。こちらは整理券を配らないといけません。こちらの人気です。「ちょこっと木工」は夏休みの課題に親子で来られる方もいます。子どもの作業に、いつしかお父さんも参加して親子で一所懸命になっている姿には、言葉だけでは伝えきれないコミュニケーションがあります。ものづくりは手と体、そして心を通じて感じ学習するものです。今こそ、子どもから大人まで、ものづくりを体験することが大切なのだと、あらためて感じています。

ものづくりを次代に伝える
活動する博物館の明日へ



「木」のことを子ども時代のように知ってもらいたい。それには本物の作家の創ったものを見て触れることが一番です。そうした教育のあり方は、ヨーロッパの方が一歩進んでいる気がします。

コレクションは約3万7百点、現在展示しているのはそのうち約1千点。ほとんどは収蔵庫にあります。今度はバックヤードツアーをしたいと思っています。

海外にも行きます。昨年はボストンのハーバード大学で企画展をして茶室模型をそっくり持っていく、大工さんも連れていって、カンナの薄削りの実演なども行いました。今年はフィンランドの3会場で企画展を開催中です。海外に日本の「木の文化」を紹介します。外国からのお客様が増えています。ヨーロッパからの方が多くいますね。

知名度が上がったおかげか、新幹線で遠くから来られて、途中下車で来館される方が増えています。アンケートで多いのは「一度では見切れなかった」という感想です。皆さん予定は1時間ぐらいでしょうから、時間が足りないでしょうね。あとは「木の匂いに癒されました」という感想も嬉しいですね。学びと癒しを兼ねてぜひリピーターとなっていきたい。一度きりでは学びきれない内容の博物館に育てていきます。

大工道具を通じて「ものづくり」を発信していきます。また、開かれた博物館として、もっと地域に貢献しなければいけないとも考えています。実現可能かどうか、いま私が考えていることの一つ

公益財団法人 竹中木工道具館

〒651-0056 神戸市中央区熊内町7-5-1
TEL 078-242-0216 FAX 078-241-4713
URL: <http://www.dougukan.jp/>



開館時間：9時30分～16時30分(入館は16時まで)
休館日：月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始(12/29～1/3)
入場料：一般500円、大高生300円、小中生無料、65歳以上の方200円
障がい手帳をお持ちの方無料



「叩く 打つ」と題された槌と釘の展示。古の手づくりの釘の妙は、「千年の釘」でも語られています



大ガンナとそのカンナ屑です



薬師寺復興にもあたった宮大工棟梁、西岡常一氏の自筆図面



日本の代表的な樹種の展示。下にはカンナ屑のケースもあって木の香りも体験できます



和の伝統美。火灯窓付きの土壁展示



かつての杣人(そまびと)たちは、木を「伐る」とは「寝かす」といった。自然に対する畏敬の念が伝わる言葉です